

五 道心の中に衣食あり

さて、私共はこの十界の中、何處に居るのでせう。之は其の各に於て自分に問うて見て貰ひたい。如何にも人生は廻る。世の中は轉ずる。廻り廻つて廻り止つた處が、死の墓場。石のシャツポを被つて仕舞ふ。「迷ふ紫陽花七色かはる、色が定まりや花が散る」此間に於て、深く心懸けねばならぬことがある。

云何したならば、この廻りを止めて、長く富滿の幸福を持つことが出来るか。それは此の圖に於て、いつも向合の反對の事を注意する。即ち富滿にあつては、昔の窮困を忘れず、將來の窮困を防ぐ。平に在て亂を忘れず、勝つて益々兜の緒を締める、という風にありたい。橋慢と知らば悔悟に志し、近く悔の來らんことを思ひ、謙遜に改め悟る。自ら奢侈と知らば勤勉に、淫佚と知らば節約に、禍變にあつては貯積を、窮困に居ては富滿を理想とし、誠心努力する。茲に向下門は一轉して向上門となるのであります。

艱難汝を玉にすとも申しますが、實際窮困と自覺するは、向上の出發點です。自ら窮困の位置に立つ、須らく反省一番悔悟の境に進み、向ひ合の橋慢を慎み、勤勉には奢侈を、節約には淫佚を、貯積には禍變を慎み、以て富滿に至らば、正に窮困を忘れず、富に居て貧を忘れざれと申すのであります。昭憲皇太后の御歌と承つてゐます中に

持つ人の心によりて寶とも、仇ともなるは黄金なりけり

と申すのがあります。ほんに左様でせう。金にかはりはないけれども、持つ人の心次第で、寶とも仇ともなる。此の心如何にすべきか。「心を弘誓の佛地に樹つ」。草木地にあれば、こゝに不動の基が出来、種々の養を得、美はしき實を結ぶ。此の心、佛心の大地に樹てられた時、始めて安らかに、始めて力

を得るのである。かくて我理性も徳性も、其の中に尊い生命を注ぎこまれて、本當に活きることが出来るのであります。「道心の中に衣食あり、衣食のうち道心なし」(傳教大師)自己を完うせんために、自分のみに満足して居る者は、終に死なねばならぬ。偏に如來に馮る者こそ、即ち自分を活かし、自分を圓滿ならしむる所以であります。

本起つて始めて末行はる。心一たび信念の大地盤に定まる時、富貴に在つて淫れず、貧賤に在つて惑はず、眞實人生の意義に徹する。若し夫れ、我等の理性を重んじて、之に基き安んぜんとせば、それは自力門の開悟の教である。徳性を重んじて、之を擲んで進まんとするか、それは自力門の戒行の教である。將又恍惚とした心ばへを重んじて、それに宿らうといふか、それは西洋の新プラト一派の教である。無念無相の感興を主として、之に停まらんとせんか、これ印度の婆羅門教の一派である。わが如來の他力の法門は、自力の修道にあらず、新プラト一派にあらず、婆羅門の派でもありません。その大信は分別でなく、修養でなく、恍惚でなく、無相でない。

誠に「貴賤縮素を簡はず、男女老少を言はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず。行にあらず、善にあらず、頓にあらず、漸にあらず、定にあらず、散にあらず、正觀にあらず、邪觀にあらず、有念にあらず、無念にあらず、尋常にあらず、臨終にあらず、多念にあらず、一念にあらず。唯是れ不可思議不可稱不可説の信樂なり」(『教行信證』)

心、一度この信樂を獲得する、破れざること金剛の如く、富貴に在つて樂く、貧賤に居て喜ばしく、悔悟痛切に、勤勉忠實に、節約度に契ひ、貯積理に従ひ、固より敬虔なれば憍慢なく、質素なれば奢侈なく、清廉なれば淫佚ならず、眞摯なれば禍變來らず、悠々自適行路の春を辿る、「便ち是れ人間の

好時節「たるを得るのであります。」